

## 社長メッセージ

第42回日本赤十字社医学会総会の開催を心からお慶びを申し上げ、総会が実り多いものとなることを期待しております。

先進国ではいずれも、医療の在り方を巡って様々な議論が闘わされておりますが、とりわけ少子高齢化の歩みが早いわが国では、医療を取り巻く環境が一段と厳しさを増しております。

国はその対策として、先の通常国会で、一連の医療制度改革関連法を成立させるとともに、療養病床の6割減、診療報酬の大幅な引き下げ、患者の負担増、DPCの拡大、病院会計準則の改正などの施策を相次いで打ち出し、病院経営や医療に携わるものにとってはもとより、多くの国民の死生観まで問い直す大きなきっかけを作りました。

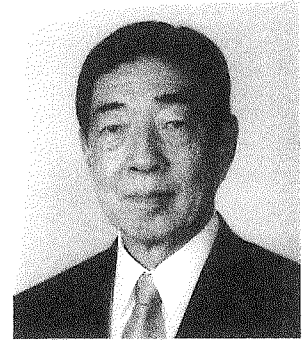
こうした改革が進む中で、安全で安心できる医療を提供し続け、なおかつ安定した病院経営を保つためには、それぞれの診療圏内での自らの将来についての基本的な方向性をいち早く打ち出さねばなりません。

慢性期と急性期医療との区分など、機能の分化と、福祉・介護との連携が時代の流れであり、特に急性期の医療機関にとっては、専門性をより高めていくことが大きな課題となっております。こうした展望が描けない医療機関は必然的に淘汰され、それが政府の基本的なねらいでもあるでしょう。現に、病院の施設数と病床数は年々減りつづけ、とくに病床数では平成15年から17年の2年間で約1万床も減少しています。

公的医療機関として位置づけられる赤十字の病院は、長い年月をかけて培ってきた地域住民からの信用・信頼に応えるべく、質の高い医療サービスの提供に努めるとともに、他の医療施設にはない「赤十字らしい」特色を発揮する姿勢が求められています。

平成16年度から導入された新医師臨床研修制度などの影響で医師不足が深刻化する中、医師確保とそのための医師育成が大きな課題となってきており、赤十字病院の医師充足率も十分ではない事実が先にマスコミで報道されました。多くの赤十字病院では、初期臨床研修医に対する研修会や後期臨床研修コースの策定、臨床研修指導医養成講習会の実施などを行って対応しておりますが、医師不足を好機ととらえ、救援活動など人道的任務の達成という赤十字病院の医師ならではのやりがいを伝える研修システムを確立する発想が必要だと思えます。いずれにせよ、研修医に選ばれ、残ってもらえる魅力ある病院でなければならぬと感じております。

増加の著しい女性医師の確保と定着のためには、働きやすい職場環境を整備することが全国的な課題となっております。看護師の確保も看護配置



日本赤十字社  
社長 近衛 忠輝

の見直しがあつて今後厳しくなることが予想されますが、職場環境の整備にとどまらず、生涯教育の場として、ブロックごとに設置を進めている看護大学を活用して、赤十字の施設で働くことの魅力やメリットを追求し売り込むこともよいのではないのでしょうか。日本赤十字社職員5万4千人の約半数は看護師です。彼らに愛され、力を発揮できる場とすることが赤十字病院の質の向上や、ひいては日本赤十字社への信頼と支持を勝ち取る上で、欠かせないと思います。

赤十字病院の大きな役割の一つに、国内外における医療救援があります。昨年の医学会総会が終了した翌日には、パキスタン北部地震が発生し、総会に参加していた会員を含めた救援要員を派遣するといった迅速な対応を行いました。さらに今年になって発生したジャワ島中部地震においても、さまざま赤十字病院の医師や看護師らが緊急救援に当たりました。こうした救援活動や復興支援のため、新年を海外で迎えた関係者は34人と、これまでに最高となりました。

アジア地域で多発する災害に対して、日本赤十字社は積極的に医療救援を展開してきましたが、こうした活動は国力の益した韓国や中国、台湾、香港、マレーシア、シンガポールといったところの赤十字社も行うようになり、いまや日本赤十字社の独壇場とはいえない状況になっております。今年6月には本社で「アジア・太平洋地域広域防災会議」が開かれ、力を付けてきた各社が、この地域での防災や救援の協力体制をどう構築するかが話し合われました。アジア地域全体のより強固なネットワーク作りに向け、救援活動の経験が豊富な日本赤十字社がどうイニシアチブを発揮していくかがこれからの課題といえるでしょう。

一方で、日本赤十字社はこれからエイズやSARS、鳥インフルエンザなど、世界的に猛威をふるう可能性の高い感染症への対応を強化していくことが求められてくると思います。幸い、島国である日本はこれまでこうした感染症の脅威に直面したことはなかったとはいえ、グローバルな取り組みを必要とし、現に取り組んでいる国際赤十字の一員としてこうした課題に真剣に向きあつてゆくことが必要であると考えます。

公的医療機関として質の高い医療を提供し、地域医療に貢献するとともに、国内外での災害や紛争の犠牲者の救援・救護にあたることは、日本赤十字社として当然の義務であります。その上で、私たちには全国的に多くの病院や福祉施設や血液センターやボランティアを持つグループとしての他にないメリットがあり、これを生かさない手はありません。それぞれの事業から集められた知識や経験、情報を共有化し、事業の壁を越えた協力関係を築くことで、人的その他の資源を有効に活用していくことをもっと考えていいと思います。

日々それぞれの病院に集まってくる診療や経営の情報を全体的にまとめて分析し、医療制度の改善に結びつく政策提言につなげていくのもよいと思います。問題意識を共有できるならば、他の医療機関と共同して取り組んでもよいのではないのでしょうか。

これからの医療の在り方は、個々の従事者や施設が個別に考えるのではなく、患者や地域住民をも巻き込んで着実に合意形成を目指すべきであり、その中で赤十字病院やこの医学会総会が果たす役割は、決して小さくないと思います。

歴史ある日本赤十字社医学会総会が、日本赤十字社の新たな可能性を切り開いて下さることを期待しております。

平成18年11月16日

## ごあいさつ

第42回日本赤十字社医学会総会が開催されるにあたり、会員の皆様の本医学会へ的一方ならぬご支援とご協力に対し、改めて深く感謝申し上げます。

この医学会は、昭和39年に発足して以来、今回の総会をもって42回目を迎えることができました。当初、医師、歯科医師及び薬剤師により構成される医学会として、「医学並びに薬学に関する知識と技術の向上を図ること」を目的としてきた本医学会は、近年、看護師、診療放射線技師、臨床検査技師等、数多くの赤十字職員が参加するまでに発展してまいりました。こうした状況を踏まえて、平成14年度には本医学会会則の見直しを行い、会員を日本赤十字社に勤務する職員の全体に拡大し、目的については、広く「医療及び赤十字事業に関する知識と技術の向上を図ること」と改正したところです。

現在、さらに評議員会の構成についても、会員の構成内容にふさわしい見直しを行うよう検討を進めており、日本赤十字社職員の総合力を生かした特色ある医学会として一層発展するよう期待しております。

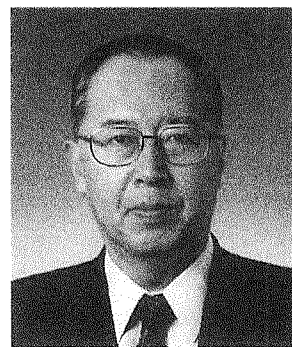
今日、医療を取り巻く環境は、急速な少子高齢化や、国民生活や意識の変化が進む中、国は様々な医療制度改革を推し進めており、多くの課題を抱えた病院経営はいよいよ厳しさを増してきております。このような中で、全国の赤十字施設から数多くの会員が集い、それぞれに有する知識・経験・情報を持ち寄って交換し、これを複数の施設、複数の専門性の視点から論じ、さらにこれをそれぞれの場に持ち帰り活用することは、本医学会の果たす大きな役割であると思えます。言い換えれば、こうした役割が、いわゆるグループメリットの成果として本医学会が残してきた大きな貢献であり、今後の可能性の基礎となるものでしょう。

本医学会の特色のひとつに、国内外の医療救援の事業をテーマにした活動があります。今回の第42回総会においては、赤十字国際委員会の人事局長であるジャック・ストローン氏を迎え、「赤十字国際委員会の国際活動に必要とされる人材について」と題した講演をいただきます。国際活動に従事する人材の育成は我が社にとって常に重要な課題であり、今後の国際活動展開のための貴重な講演であり、ひいては、今後、日本赤十字社が果たす貢献にとっても大きな意味を持つ講演でありますので、多数の会員のご参加を期待いたします。

日本赤十字社の医療事業においては、医療の提供のみならず、他の赤十字事業との良好な連携に基づく事業の実施が大きな特色であります。また、こうした活動の実態を赤十字医療施設の特色として、効果的に外部に示すことも重要です。この意味においても、本医学会が果たすべき役割はますます大きくなってきており、会員の皆様とともにこの重責を果たしていきたいと考えております。

最後になりましたが、今回の総会をご担当してくださった高槻赤十字病院院長の人見滋樹会長をはじめとする高槻赤十字病院職員の皆様、さらには近畿ブロックの赤十字病院をはじめこの総会の開催にご尽力いただきましたすべての方々に感謝を申し上げますとともに、みなさまのご健康を祈りつつ、挨拶とさせていただきます。

平成18年11月16日



日本赤十字社医学会  
理事長 **山田 史**  
(日本赤十字社事業局長)

## ごあいさつ

### 地域の人々が感動し、誇りとする病院

第42回日本赤十字社医学会総会は近畿ブロックの担当で、高槻赤十字病院がお世話をさせて頂くこととなりました。高槻赤十字病院職員一同光栄に思い、その機会をお与え下さったことに感謝いたしています。

総会のメインテーマを「地域の人々が感動し、誇りとする病院」と致しました。昨今、医療界には難問が相次ぎ、ともすれば守勢の医療に陥る可能性が危惧されます。これでは真の医療の発展は望めません。医の原点は病める人を救いたいという純粋な思いから発するボランティア精神にあり、この精神に基づく医療行為を受けて患者さんは感動し、その医療人に全幅の信頼を寄せるものです。そしてその医療人と病院を自分たち地域の誇りとするのです。今回のメインテーマはこの思いを込めて決めました。

特別講演は日野原重明先生に「医療のシステム化と効果的医療の展開」と題してご講演頂きます。教育講演は堀田力先生に「病院と地域との連携」と題してお話し頂きます。特別報告として、スイス本部のジャック・ストローン氏が「赤十字国際委員会 ICRC の国際活動に必要とされる人材について」と題して講演されます。講演後に特に関心のある会員と懇談会を持たれますので、自由に振るってご参加下さい。演奏とトークでは日本人最初のユネスコ平和芸術家で赤十字活動に理解を示されている二村英人氏がヴァイオリンとピアノを弾きつつ、音楽と平和への思いをお話下さいます。

シンポジウムは「地域連携への取り組み」と「ホスピス緩和ケアに求められているもの—課題と展望—」の2題としました。いずれも今日の医療に強く求められているテーマです。

演題数は522題に及びました。多くの演題をお寄せ下さった皆さんに感謝します。要望演題は口演とし、一般演題はポスターセッションと致しました。熱心な討論を期待しています。

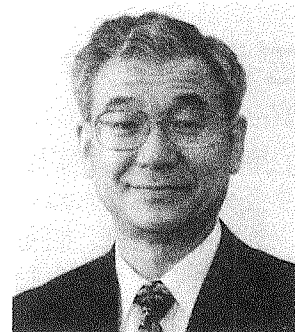
特別展示として、神戸市立盲学校の生徒が作った粘土像を展示します。福来四郎氏の指導の下に眼の不自由な子供達が作った作品には、見る人の心を打ち、生きる元気を呼び起こしてくれる力が込められています。是非ともご覧下さい。

学会の目的は二つあり、第一は学術の進歩への貢献であり、第二は志を同じくする者同士の交流です。同じ赤十字社の医療人として、職域を越えた親交が深められ、明日へのエネルギーの源となることを期待しています。

医療人の集いでは京都の古典芸術保存会の皆様による蹴鞠をお楽しみ頂きます。

京都の紅葉は素晴らしいです。多数の皆さんのご参加をお待ちしています。

平成18年11月16日



第42回日本赤十字社医学会総会

会長 **人見 滋樹**  
(高槻赤十字病院院長)